

審査の結果の要旨

氏名 島内裕子

本論文は、『徒然草』の文学的特質およびそれが後世に及ぼした文化的影響について、「徒然草文化圏」という本論文独自の観点から分析したものである。まず冒頭の「はじめに」において、本論文全体の問題意識と方法および構想を明確にしたのち、本論を六部十六の章から構成する。

第Ⅰ部「生成する徒然草と兼好」は、三つの章から成り、作品としての『徒然草』そのものの文学的特質を分析する。いずれの章も、同書を現存の章段配列に従って連続的に読解する、著者独自の「連続読み」の方法により、また後世の享受などをも媒介にすることで、『徒然草』から、単一の主題でなく、兼好の思索の深化や成熟を読み取っている。

第Ⅱ部「徒然草文化圏としての注釈書と兼好伝」は二つの章から成る。まず『徒然草』の初期注釈書『寿命院抄』と『野槌』を比較しつつ丁寧に読み解き、とくに『野槌』の著者林羅山の執筆姿勢から、『徒然草』が自らの教養を開陳する拠り所となった事実を読み込んだ読解に創見が見られる(第一章)。また林読耕斎『本朝遯史』・元政『扶桑隱逸伝』の、隱遁を自由なる精神の表れだとする捉え方が、近代にも通じる普遍的な兼好の定立につながったとする。さらに伊賀市種生の実地調査をもとに、兼好終焉伝説の文化的広がりを跡付ける。中でも、篠田厚敬『種生伝』ほかの成立等の所見に成果を出す(第二章)。

第Ⅲ部「近世の思想と文化にみる響映」は、第一章が江戸時代の儒学者佐藤直方の徒然草抄出書、第二章が広瀬淡窓の徒然草を詠んだ漢詩についてで、それぞれをこまやかに読解し、ともに心の深部で『徒然草』を受け取り、同書の文学的本質を浮き彫りにしていることを解き明かす。

第Ⅳ部「徒然絵の誕生と展開」は、『徒然草』を絵画化した諸作品を追尋して、その文化圏の広がりを明らかにする。まず第一章で絵画化の諸相を分類し、とくに『なぐさみ草』等注釈書の挿絵の影響の大きさを指摘する。各論として「熱田屏風」・「上杉屏風」(第二章)、新出の「徒然草淡彩色紙」(第三章)、いまだ考察のなかった「芸大画卷」(第四章)を取り上げ、対応する章段を特定した上で、その成立や意義を丁寧に考察する。

第Ⅴ部「近代文学と徒然草」は、近代における研究史(第一章)と文学作品との関係(第二章)を概観したのち、主として樋口一葉の文業にもたらした『徒然草』の意義を、とくにその日記を詳細に分析することで明確にしている。

第Ⅵ部「世界文学としての徒然草」は、海外における『徒然草』研究・注釈の軌跡を初めて一覧整理し(第一章)、諸国の現代芸術家の『徒然草』評を取り上げて、全体の結びとしている。

本論文は、新出資料をも多数発掘しながら、近世・近代の『徒然草』・兼好研究、絵画資料、文学作品などへの影響を具体的に明らかにしつつ、日本文化の中で『徒然草』を意味づけようとしている。個々の指摘の中には、さらに考察を深めるべき箇所などもまた存するが、本審査委員会は上記のような研究史的意義を認め、本論文が博士(文学)に十分値するとの結論に至った。